

財団法人 黨民族舞蹈文化財団



舞 踊 文 化  
E. T. C.

NO. 9



## 目 次

中国民族舞踊と稲作文化（２） 前雲南省舞蹈家協会常務副主席 劉 金吾

### 一 稲作文化中の模擬舞踊と農耕の関係（続き）

|                         |   |
|-------------------------|---|
| 1. チンポー族のブクンゴと刀耕 .....  | 2 |
| 2. イ族の阿細跳月と焼畑 .....     | 4 |
| 3. ジノー族の生産舞と棒耕 .....    | 6 |
| 4. リス族の生産舞と木鋤 .....     | 7 |
| 5. チワン（壮）族の手巾舞と農耕 ..... | 8 |

### 自然人アイヌ

|          |             |              |   |
|----------|-------------|--------------|---|
| こころの歌と踊り | 阿寒湖ユーカラ 座座長 | 四宅 豊次郎 ..... | 9 |
|----------|-------------|--------------|---|

|                           |    |
|---------------------------|----|
| 平成12年度黛民族舞踊文化財団活動予定 ..... | 11 |
|---------------------------|----|

## 中国民族舞蹈と稲作文化（2）

前雲南省舞蹈家協会常務副主席  
劉 金吾

### 一 稲作文化中の模擬舞踊と農耕の関係（続き）

#### 1. チンポー族のブクンゴと刀耕

これから我々はブクンゴの動作の名称を詳しく見ていくことにしよう。この動作の名称で耕作の内容をシミュレーションできるし、それが生まれた時代の背景、当時の社会の生産力の水準、生産方式、それを担う人々の心理状況、生活の情景、思考能力、そして感情表現の方法などを理解することができる。そしてこれら一切のものが稲作文化の範疇に属するのである。一点つけ加えると以下に詳述する事柄は我々が収集し、学習したものに限られており、遺漏もあると思われる。すなわちブクンゴは下記の記録よりもさらに広範な内容を持つということである。

食糧生産の一連の動作は

1. ベンショ（載瓦支系語 以下同様） 開始
2. ヨンゴンソソ 跳んだり走ったり  
（この二つの動作からすべての舞踊参加者は同一の歩幅、リズムで踊る）
3. ベンチュエザイ 道づくり
4. ノンツン 歩いてまた戻る——続けて道をつくる
5. チース 地をこする ——土を掻く
6. チートゥ 足を上げる ——盛土をする
7. ワイツァオ ややゆっくり ——用心してゆっくりやる
8. チョンナ 地を踏む ——土地をならす、種まき
9. ユエチャムー 少し急いで ——力強くやる
10. ジャンショザイ 豆の茎を切る
11. ジャンショツワン 豆の茎を引く
12. ジャンショシュ 豆の茎を植える
13. ジャンショチョン 豆の茎を圧する
14. ジャンナイナイ 豆のつるを上にあげる
15. ジャンボーボー 豆が開花する
16. ジャンルンバン 豆を打ち出す
17. ニウシピャオ 猿が来て穀物を食べる
18. ニウベンガイ 猿を打つ

---

|                  |               |
|------------------|---------------|
| 19. ニウツワン        | 猿を引っ張る        |
| 20. ニウグオツ        | 猿の皮をむく        |
| 21. ニウグオラ        | 猿の皮をさらす       |
| 22. バンバン         | 刀のさやを打つ       |
| 23. ウエイカン        | 水をすくう（刀を研ぐ）   |
| 24. シャンムシェイ      | 刀を研ぐ          |
| 25. シャンムザン       | 刀の上から水が滴る     |
| 26. ニージャオ        | 火を炊く          |
| 27. アオツ          | 鍋を火にかける       |
| 28. ウエイガン        | 水を注ぐ          |
| 29. アオヌオ         | 水をかきまわす       |
| 30. アオトゥン        | 鍋を下におろす       |
| 31. ザンナ（ミウゴシャンナ） | 猿の肉を米に浸して飯を炊く |
| 32. ゴチャンシャオ      | 飯を炊く          |
| 33. グシェンシャオ      | 米を皆に配る        |
| 34. グツダン         | 新米をとる         |
| 35. グチョンルー       | 新米を炒る準備をする    |
| 36. グショントン       | 新米をつく         |
| 37. グシビエン        | 糠をふるいにかける     |
| 38. グシェンチョ       | 新米を食べる        |
| 39. イリュエ         | 酒をつくる         |
| 40. ベイポーソン       | 汗を拭く          |
| 41. ヌオピャオヤオ      | 耳垢をほじる        |
| 42. モーピーバン       | 目の前で蚊をたたく     |

上記の一連の動作の名称からしてブクンゴの表現する食糧生産の内容がたいへん豊かなものであることがわかる。3～9までは道をつけることから始まり、土搔き、種蒔き、盛土、種への土かぶせ、地ならし、種押しとこれらは焼畑農業の内容である。刀で穴を掘る重要な動作が抜けているが、それには二つの解釈が可能である。一つは原始の状況を模倣したため完全に復元するまでには至らず、この過程を模倣しなかった。もう一つはもとの舞踊にはこの過程が存在したのだが後世の継承者が（あるいは私がこの舞踊を収集した村の村人が）忘れてしまった。10～16は豆の成長過程と豆を植えるときの主要な技術——すなわち豆の茎の栽培や豆のつるの巻き上げなどである。17～21までと31はかつて祖先たちが遭遇した猿の群れがよく出没しては作物を荒らす、というような普遍的な現象を表現している。このため多くの民族の生産舞踊にはどれにも猿を打ち殺す内容のものが含まれている。チンポー族のブクンゴの動作で他の舞踊と違うところは猿をただ打ち殺すだけではなく、その延長としての食文化、すなわち猿の皮をはいだ後、その肉に米を浸して飯を炊き食べるという内容がつけ

加えられている。これは生産の知識であると同時に生活の知識でもある。22～25までの四つの動作は刀にはさやの保護が必要なことと刀を研ぐために水が必要なこと、すなわち生産器具への保護と修繕の問題が説明されている。刀は当時の主要な生産器具であり、その保護や補修の方法は大変重要な知識であってそれらは記録され、伝承されなければならない性格のものであった。26～30までと32は飯をふっくらと炊き上げるための知識である。火をつけてのち鍋を火にかけてそれから水をそそぐ。水の攪拌過程ではもし水をかきまぜないと米が鍋の底にくっついてしまう。また先祖たちは火を用いて物を加熱して食べたが、これは飛躍的な進歩であった。34～39、これは稲の収穫後の脱穀、ぬか取り、炊き上げまでを説明し、さらに米から米酒をつくる技術まで把握している。その中の33. グシェンシャオ（米を皆に配る）をまねた動作は当時の社会形態がまだ原始社会の集合的な生産と分配の時期にあることを示している。

この他のブクンゴの特長は一つ一つの生産過程の模倣はすべて単一の動作ではなく組み合わせられた一連の動作であり、特有の規律をもっていてどの一つの具体的な内容をみても最初と最後の動作は不変であり、僅かにその途中の足や手を使っての表現がその内容の特徴づける模倣動作となっている。その模倣には具体的なものも抽象的なものもあり、ジャンボーボー（豆が開花する）の模倣動作——両腿の屈伸にあわせて両足を動かし、体の前方の地面に片足で180度の半円を描く——のように教えてもらわなければその動作の意味が分からないようなものもある。しかしチンポー族の人達にとってはまったく自明のことであるという。

## 2. イ族の阿細跳月と烧烟

“阿細跳月”は雲南省のイ族の支流アシ族、サニ人の伝統的な舞踊である。アシ語の“アスオビ”と“ガスビ”はそれぞれ“手を叩き飛び跳ねる”“楽しく飛び跳ねる”という意味である。老若男女はみなこの踊りをとっても好み、いわゆる“三弦が響くのを聞くと（踊りたくて）足の裏がうずうずしてくる”という言葉はこの舞踊の人々に対する感染力を的確に表現している。踊るときに男は大三弦を背負って舞いながら演奏し、女は手をたたく。竹の笛や木の葉で伴奏する。舞踊は終始飛び跳ねたり足を交互に出して飛んだりして進行する。楽しく熱気のある雰囲気ですアシ人、サニ人の激しく、朗らかで純朴な民族精神と性格を表現している。



イ族の阿細跳月

言い伝えによると大昔にサイとヤギがけんかをして、そのひづめが石にぶつかり火花を發した。その火花が燃え移り、森林は瞬時のうちに火の海となった。アシ人はみなその火の海の中で命を落とし、ただ一組の青年の男女が残った。二人は焼けただれた土地に戻り、そこを耕して作物の種を撒いた。火で焼けた土地はとても熱くて二人は片足ずつを地につけて飛びながら働かざるをえなかった。火の灰が足に絡みついたので、二人は力一杯足を踏ん張って灰をふるい落としたが、そのとき同時に口から「あちち、あちち」という声が出た。その後しだいに舞踊の形が整えられ、現在の形になった。先ず足を交互に三歩跳び、それから片足を空中で二回前に蹴る。合計五拍の組み合わせが基本となる。この伝説はかつて先祖たちがちょうどよい季節に火をかけた山に行き、まだ完全には冷えきっていないその山を耕す情景を彷彿とさせる。同時にまた“阿細跳月”の舞踊をまねることにより、その姿が生き生きと描かれる。この伝説は真実かどうかあまりあてにはできないが、それでもある程度生活に依拠しており、当時の歴史条件に合致している。その他のいくつかの“阿細跳月”に由来する伝説はそれらのすべてが山火事を消し止めることと関係している。一説にはこの舞踊は山火事を消すことをまねる動作だと言い、またある説では幸いにも山火事にあった後に生きのびた喜びのあまり舞い始めたものだと言い、さらには山火事を消すために身を捧げた人を追憶するためのもの等々……。著者は思う。はるかな昔、まだサイが雲南に生息していたころ、険しい山中でもし村落を焼き尽くすような大火が発生したら炎から逃れることができた村人はほんのわずかであったであろう。もし伝説が語るようにほとんどのアシ人が焼け死んで、たった一組の男女だけが幸いにも生き延び、その二人が山火事を消すために命を捧げた人々を追憶して踊ったとしたらその踊りはこのように楽しげなものには（あるときには歓声をあげ、飛び跳ねるほど快活におどる）ならないであろう。焼死をまぬかれた一組の若い男女が火に焼けた土地に来てそこを耕し、作物を植えて生活を始め、子孫を残し、すべての民族が繁栄するようになって始めて、それが幸福に、また楽しい事になり得るのだ。踊り自体の模倣について言うと、熱くて足で踏めない土地を耕すのは焼畑の痕跡であり、現在でも男舞いの足を交互に踏みだし三歩跳ぶ時、口を開けて二度息を吸い、そのとき息をする音を出すの



イ族の民族舞踊

は火の中に足をつく感覚で、おそらく「あちち」の変形であると思われる。

### 3. ジノー族の生産舞と棒舞

ジノー族は農業を主として、今世紀の1950年代初期までずっと焼畑農業を踏襲し、森林を開発し、荒廃させる生産方式をとり続けてきた。焼畑農業の第一歩は農暦（昔の太陰暦）の1月、2月の間に吉日を選んで木を切り、開墾することから始まる。先ず村の長老が氏族や家族のメンバーを代表して木を三日の間切り、切り倒す木の前に三つのショウガとサトイモを植える。これは女性の始祖アモゴバイの時代に邪気を払う作用を持つショウガとサトイモの植栽が始まったので今に至るまで続いているのだという。（注1）

切り倒された木はおよそ半月の間日光に晒され、その後火が入れられる。地を焼く前に先ず山火の延焼を防ぐための防火線がやはりまわりの木を切ってつくられる。木を切り、その土地を焼いた跡には掘っ立て小屋がつくられる。小屋が建った次の日から種まきをする。先ず綿花の種をまき、その後に陸稲の種をまく。種まきに際してはその村の長老が先ず祭祀の儀式をして祈禱文を読む。それは土地神に向かっては作物がよく育つように、すでに世を去った父母にはカラスやスズメが来て作物を食い荒らす事のないように守ってもらうという内容のものである。種まきの時、男は種まき棒で穴をあけ、女は男のうしろについてその穴のなかに種をまく。男が棒を抜くと女が種を穴の中に落とす。男女はぴったり寄り添い、動作を協調させ、その姿は優美である。踊りは基本的にこのような労働の動作を模倣し、再現したものである。以上のように見てくると、ジノー族の焼畑農業は組織的に行われ、とりわけ土地を焼く前に山火の延焼を防ぐための防火線を切り出すということは、彼等が土地につ

いてある程度の認識を持ち、自然に打ち勝つ方策を身につけていることを示している。種まき棒を種まきの主要な生産工具としていることがジノー族の長期的な生産方法と生産力の発展水準を典型的に表している。



ジノー族の糸つむぎのおどり

注1：陳平《基諾族風俗誌》  
中央民族学院出版社1993年  
版第67ページ

#### 4. リス族の生産舞と木鋤

リス族の居住地区は概して険しい高山であり、土地はやせていて、ほとんどの耕地が五、六十度の角度の傾斜地である。上を見ながら登っていくと、さながら土地が急坂の上にかぶさっているようである。リス族の農民が使っている「アヒル口の鋤」は上部が粗く下部は薄くて内側に湾曲し、アヒルのくちばしにそっくりである。リス族の老人の話によるとこの鋤のおかげで石が多くて土地のやせている傾斜地で耕作することができるという。また、リス族地区では鉄の道具はとびきり値が高くてほとんどの人がそれを使うことができない。鉄の鋤を持たない農民たちは木の枝が湾曲しているのを利用して「シーアゴ」(木鉤鋤)をつくり土地を耕し、種まきには竹べらか木べらを使う。牛耕に適した土地は少ない。犁耕の方法では一人が前に出てひっぱりもう一人が後ろから犁を起す。土の層の厚みが不均一で地面には凹凸な石が多いので高価な鉄犁は簡単に石や礫のために毀損し、わりにあわないためあまり買われない。あるリス族地区ではまったく犁耕できないという。彼等は種まきの前にトウモロコシを地中に埋めておき、豚を放つ。豚はその場所を鼻でほじくる。その後その土地は鋤で耕せるようになるというわけである。耕作もまた粗雑なもので、大方は種まきの後は草もとらず、鋤もかけず、肥料も施さない。1ムー(15分の1ヘクタール)当たりの収量も低く、トウモロコシでは1ムー当たり100キログラムに満たない。川辺の土地は水稻栽培に適していて、1ムー当たりの収量も200キログラムを越えるほどになる。(注2)

リス族の生産舞は土起こし、種まき、収穫、脱穀、稲担ぎ、猿退治等の内容の模倣になっている。楽器による伴奏は付かないが、リズム性が非常に強く、足裏すべてを使っの足踏みの音はすでに豊富で力強い伴奏になっていて、しかも独特の風格がある。すべての模擬動作は足でのリズムとりは一定していて、腕の動作だけが変化する。土掘りの模擬動作では両手を高く上げてすぐに下ろす。木鋤(短めに持つ)を使っの斜面での穴掘り動作では両手は高く上げてても頭の高さを越えることはなく、上半身はずっと前屈みのままである。稲担ぎの模倣では額の両端を両手で支え、猿退治の模倣の時は胸の前で両手で拳をつくり、その後で斜め上方に打ち出す。その際に両方の人差し指を押して鉄砲を打つような形にする。

リス族の模倣的な生産舞やその際の木鋤の使用はリス族の過去に依拠してきた自然環境、社会生活、生産状況、生産力の発展水準及び生産方式で説明できる。木鋤は木の枝を曲げてつくり、たいした加工を加えていないごく簡単な生産工具である。犁の代わりに豚を使っの生産方式はその思考水準と自然に打ち勝つ能力がいかに脆弱なものであるかを示している。

上に述べた状況は1950年代の社会的変化、時代の進歩にひとたびさらされると決してもとに戻ることにはなかった。今日のリス族は政治、経済、文化等の方面で世紀を越える飛躍発展をとげて、生産方式は徹底的に改革され、木犁はすでに歴史博物館の展示品となり、代替犁の豚による土起こしの生産方式は遙か昔の伝説と化している。

注2：《石器与鉄器併用的地方》(1996年8月雲南日報—王連芳民族工作回憶17)より引用

## 5. チワン（壮）族の手巾舞と農耕

“手巾舞”はチワン族の民間舞踊の一種であり、チワン語では“シェンニマー”“ロン(ron: チワン語で“舞踊”の意味)アラ”“ロンアヤ”“ロンヤーチャン”等と呼ばれ、それは踊るときに手に手ぬぐいを2本持って踊ることから名付けられたものである。もとは伝統的な春節の灯会（訳注1）のときの舞踊であったのが、踊りだけひとり歩きして独立した舞踊形式として成立した。灯会のときには娘たちは片手に手ぬぐい、もう一方の手には六畜灯を持つが、これ



チワン族の農民

は五穀豊饒、六畜旺盛を祝ってのことである。灯会から独立した手巾舞では両手にそれぞれ一本ずつの白手ぬぐいを持って踊る。舞踊の動作は種まき、間引き、田植え、草取り、脱穀、猿退治、米つき等の稲作生産の模倣に由来している。この踊りは女性舞踊だから模倣される舞踊の動作もまた女性が担当する稲作の部分表現している。それと同時にこれらの稲作舞踊の中にチワン族の生産方式及び耕作の水準、男女の分業——女性が軽労働ではあるがこまやかな仕事を、男性は田おこし、田すき、苗選びなどの重労働を担当——を見ることができる。これによるとチワン族の稲作は粗雑な耕作ではなく、すでに間引きや除草等の中耕稲作の段階に達し、米つきによる脱粒技術も持っていたことになる。



チワン族の手巾舞

翻訳：黛民族舞踊文化財団 藤原明人

訳注1：灯会 一般的には元宵節（旧暦1月15日）に開かれる。さまざまな彩灯（飾り灯籠）を見る娯楽的な催し、出し物が演じられることも多い。

## 自然人 アイヌ こころの歌と踊り

阿寒湖ユーカラ座座長  
四宅 豊次郎

### 第6回 奉納舞踊

老人を大切にあつかうことは、アイヌの日常生活においても道徳心情の一部とされて、子供の頃からその都度教えられて育ってきた。

「コタン・アパコレ」という言葉があり、これは「部落の人材」という意味である。

村に住む者は、それぞれ役目をになって存在しているという考えに基づいて、老人から幼児まで全員が貴重な財産なのだ。

子供はやがて成長して、村を支えてゆく人材になるのだが、老人はこれまでの長い人生の中で培ってきた、いろいろな経験や豊富な知恵をもっている。

村の運営は、なにも壮年や若者達の力だけで成り立っているわけではなく、時には老人の考えや判断が必要な事態もあるから、たとえ今は寝たきりの老人でも、決して粗末に扱うことはしない。

“祖先からの伝承は尊べ、先人の教えには耳をかたむけよ”と教えられてきた。

生活する上で最も基本となる衣・食・住のことや、生業、歌舞なども、先人達の感性や貴重な体験そして工夫によって、後世に伝えられ現在に活用されているからである。

コタン（村）で祭りや行事がある時には、歩行困難な老人は、若者達が身体を抱きかかえるか、背負って会場へ連れてくる。

楽しい祭りの広場で、みんなと共に酒を飲んだり、ご馳走を食べたりすると、家庭内での飲食とはまた違って、ひとしお美味い味わいと何ともいえない解放感がわくものである。立ち上がって踊りの輪に入ることができなくても、一緒に歌い手をたたいて拍子をとるだけで、心がおどりうれしい気分になる。

アイヌの男性の踊りで「タプカラ」というのがあり、日本語では「踏舞」と訳していて、壮年の者も踊るけれども、主に長老が舞うのが普通である。

奉納舞踊（3）                      タプカラ   （踏舞）

tap kar

ハァー エー ハァー エー

haa — eー haa — eー

—くり返して歌う—

（特に意味をもたない、声だけのもの）

このハァー エーの発声は一定しているものではなく、ウウ エーとなったり、オオ ウェーとなり、その人により異なって多種多様である。

舞台の中央に立つと、手のひらを上に向けて両腕を少し広げて前にかざして、静かに上下させながら、足を互いに一歩また一歩と踏みしめて舞う。たいてい人は足踏みを力強くし

て、ドン ドンと床音を高くたてて、いかにも力踏み  
の感はあるが、高齢の方は  
静かに床を踏みしめて、何  
ともいえない趣がある。特  
別な歌詞をもたないが、自  
分自身の感情の湧き出する  
ままに、声を出してゆっく  
りと舞う。

腹の底から絞り出すよう  
な震え声は厳かにあたりに  
響いて、まるで天の声か大  
地の響きのように聞こえ、  
その場にいる人々の心を引  
き付ける。

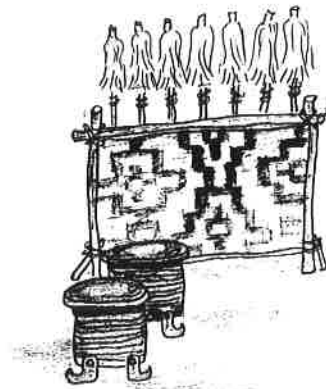
時には足腰の不自由な老人を、若衆が両側から腕を抱きかかえて立ち上がらせて、何とかこのタナカヲを踊らせようとする事もあった。こういう場での老人の顔は“幸せこの上ない”といった嬉しい様子で、世話をしてくれている若衆に感謝をしつつ喜んで単調ではあるが両手を上下させて舞うのである。

われわれの大先輩である山本多助エカシ（長老）などは「俺がまだ若かった頃には、このような場面を何度と無く見てきたが、その風情といたらそりゃ何ともいいものであったなあ」と語り、つづけて「自分はエカシ達の舞うタナカヲが男の最高の踊りだと思っているよ」と言いながら、一瞬遠い青春の日を偲ぶように目を細めていたことを、私は時折思いおこすことがある。

それは今の時代になると、そういう情景を次第に見られなくなったという、長老達の悲哀感であるのかもしれない。

近年、北海道の各地で催されるアイヌの行事に行っても、このタナカヲは殆ど見る事ができなくなってしまった。

幸いなことに我がアイヌコタンでは、現在二名の方がタナカヲを舞うことができる。アイヌの男性を代表する崇高なタナカヲであるから、この世から忘れ去ることのないように、自分達も一生懸命に練習をして、後世にも伝えてゆかなければならないと考えているところである。



タナカヲを舞うエカシ  
(長老)





麗江・玉泉公園の鎖翠橋（『人民中国』より）

平成12年度黨民族舞踊文化財団活動予定



平成12年 4 月 1 日（土） 千葉県佐原市「香取神宮御田植祭」取材

5 月 29 日（月） 黨民族舞踊文化財団総会

5 月 31 日（水）

～ 6 月 11 日（日）黨民族舞踊団訪中

（中国雲南省昆明市・麗江州・迪慶州）

8 月 16 日（水） 秋田県羽後町「西馬内盆踊り」取材

10 月 訪中公演・取材報告会開催

舞踊文化 E. T. C. No. 10 発行

民族舞踊文化 No. 13 発行

編集後記

舞踊文化 E. T. C. は年二回発行予定 ※皆様からの投稿をおまちします

平成12年 5 月 15 日 財団法人 黨民族舞踊文化財団

港区赤坂 3-10-3 電話 03-3583-3633・3606

FAX 03-3583-3639